「境界線」

伊藤貴晴　作

少女 私は、今、舞台に立っている。舞台といっても、今、ここをそういう風に区切っただけ。ここからこっちが舞台。ここからそっちは客席。でも、そっちに行ったからといって私は観客になれるわけではないし、お客さんがこっちに来たからといって俳優になれるわけではない。俳優と観客の何が違うのか私には分からない

少女 舞台には照明が当たっている。光は七色に分解できる。赤（せき）、橙（とう）、黄（おう）、緑（りょく）、青（せい）、藍（らん）、紫（し）。これを光のスペクトルを言う。でも本来、色と色の境目はなくて、色は便宜上分けられているだけ。光の三原色はＲＧＢ、レッド、グリーン、ブルー。混ぜると白くなる。一方、絵の具の三原色はＣＭＹ、シアン、マゼンタ、イエロー。混ぜると黒くなる。シアンとマゼンタはどっちがどっちか私には分からない

少女 音楽はスピーカーから出てくる。でもスピーカーに入るところは見たことがない。音楽はＢＧＭとかＳＥとか言い方がある。ＢＧＭはバックグラウンドミュージック。ＳＥはサウンドエフェクト。システムエンジニアのことでもある。ＢＧＭとＳＥの違いはあるような気がするけど、何が違うのかと言われるとうまく説明できない

少女 違いの分かる女になりたいと思った時期があって、色々試してみたけど、どうも私は違いが分からない女なのではないかと思う。スタバとドトールの違いはよく分からないし、そもそも私コーヒー嫌いだし、カフェオレとラテとコーヒー牛乳の違いも私には分からない。レギンスとスパッツはどっちでもいいと思うし、何なら股引（ももひき）と言ってもらっても一向に構わない。ロックとパンクとプログレとオルタナの違いもよく分からないし、あだち充の漫画はどれがどの作品なのか区別がつかない

少女 どこかに境界線があるんだと思うけど、私には見つけられないのではないかと思う。例えば私。私の体はここにあるけど、私のつま先を私とは言わない。抜け落ちた髪や切り落とした爪を私とは言わない。私のお腹の中にいる乳酸菌は私ではない。私か私以外かの境界線がどこかにあるはずだけど、私には分からない。顔さえあれば私だって認識できる。でも顔がなくなったって私は私。半年後に体中の細胞が入れ替わったって違う私になるわけじゃない

少女 例えば海。波が寄せては引いてる波打ち際は、寄せてるときは海で、引いてるときは海じゃないのか。そもそもそこは波打ち際で海ではないのか。じゃあどこから海なのか。海水が海だとしても、バケツにくんだ海水は海ではない。例えば山。登山はどこから始まるのか。登山道の始まりはあっても、山の始まりはない。どこから登山なのか。ピクニックとハイキングとはどう違うのか。バナナはおやつに含まれるのか。境界線の狭間を揺蕩（たゆた）うバナナを握りしめて不確定な登山に出発する私に幸（さち）あれ。ま、登山には行かないけど

少女 例えば演劇。悲劇と喜劇は紙一重だって言うし、コントは演劇じゃないって言うし、人形劇は演劇とは違う気がするし、でもやっぱりコントは演劇でいい気がする。演劇の始まりの境界線は私には見つけることはできない。気がついたら始まっていて、私はいつも後になって気付く。演劇の終わりの境界線も分からないかもしれない。ひょっとしたら私の演劇はもう終わっていて、演劇のフリをしているだけなのかもしれないし、観客だって本当は観客のフリをしているだけなのかもしれない。ひょっとしたら私の演劇はいつまでも終わらなくて、実は私は演技を続けていて、私に出会う人は観客として私を見てて、そうやって私の演劇はいつまでも続いていくのかもしれない。とはいえ、舞台に立っている時間には限りがあるから、やっぱり私が舞台を降りたら私の演劇は終わりってことでいいと思う。

 終わり。